

効果的な取組みのポイント (教員の相互理解)

幼稚園・保育所と小学校は教育課程が違うので段差があって当然だが、不必要な段差は子どもたちのために解消していかなければならない。互いが相手の「不十分なところ」を指摘しあうだけでは、何も生まれない。

それぞれが理解しあい、互いにできることを見つけあうことは、お互いの指導法の改善にとって必要なことである。



(1) 合同研修、相互参観、体験

- ① 地域の子どもの実態や目指す子ども像を共有できるような会議を定期的で開催することが効果的である。
- ② お互いに課題意識を持つ事柄について、テーマを具体的に絞って合同研修を実施する。
- ③ 座学に加えて、参加体験型の研修など工夫して楽しく学ぶ。

(2) 段差を意識した取組み・・・「接続期」の設定&カリキュラムの見直し

- ① 小学校が幼稚園の指導法や子どもへの対応の仕方を学ぶことは大変有効である。より年齢の低い子どもへの指導法は、対象年齢の高い学校では気付かない様々な配慮や工夫がなされている。
- ② 「接続期」(5歳児後半～1年生前半等)を設定して、幼稚園側と小学校側で教育課程に関して見直すべきことや子どもへのかかわり方を幼保小合同で検討しあう。
- ③ 例えば、子どもたちの「数」の感覚や基本的な生活習慣、学習規律という面でも、就学前の子どもと小学校の子どもの発達や学び、教師のかかわり方を具体的に比較整理していくと、解決すべき課題や互いの配慮すべきことが浮かび上がってくる。
- ④ 幼稚園では、小学校へのなめらかな接続を意識して「協同的な学び」を教育課程に位置づけるという取組みが始まっている。このような取組みは幼保小が連携することによってより効果が上がると考えられる。



資料

「協同的な学び」

中央教育審議会

「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」(答申)H17.1.28

- 幼稚園等施設において、小学校入学前の主に5歳児を対象として、幼児どうしが、教師の援助の下で、共通の目的・挑戦的な課題など、一つの目標を作り出し、協力工夫して解決していく活動を「協同的な学び」として位置づけ、その取組みを推奨する必要がある。
- 遊びの中での興味や関心に沿った活動から、興味や関心を生かした学びへ、さらに教科等を中心とした学習へのつながりを踏まえ、幼児期から児童期への教育の流れを意識して、幼児教育における教育内容や方法を充実する必要がある。

(3) イメージを具体的に

- ① 校種間ではいわゆる「文化」が違うので、共有する言葉の中で互いのイメージがずれていたり、同じ事柄でも指導法が暗黙のうちに違っていたりする事がある。相互に言葉の定義を意識しながら子どもの実態や指導法について具体的に情報交換することが大切である。
- ② 具体的に情報交換したことを文書に整理することは、成果の確実な共有化につながり、幼保小連携のより一層の推進を促すと考えられる。